



## 飛行機に乗ったドン・キホーテの世界漫遊

深川の由来

自己紹介

あゝ 禿げた頭でも値引きなしか？！

「東京のドン・キホーテ」の名前の由来

12年間の海外生活で35カ国を訪れる

“エッ 日本は地球の裏側”だって？

「赤道」クイズ・・・地球をまたぐ

「五つの『あ』の原則」

「日本に行ったら日本人だらけだった！」

世界で語られている日本人のジョーク

国際化とは？真の国際人とは？

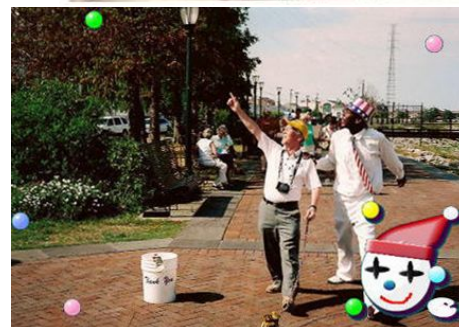
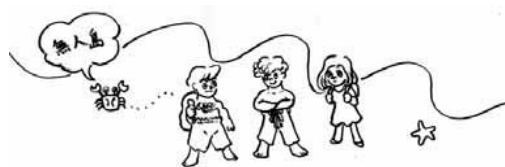
寝ている間に仕事が進む「魔法のマクラ」

日野原重明氏から学ぶ

ライフワークの世界文学紀行

定年後を輝いて生きるために

「ハゲアタマ」で輝こう！



## 飛行機に乗ったドン・キホーテの世界漫遊

ただいまご紹介いただきました清水武でございます。皆様とお話をさせていただく機会を与えてくださりましてありがとうございます。深川といえば半世紀以上も前、まだ私が信州で子供だったころ、祖母、つまりおばあちゃんの兄弟が深川で呉服店を営んでいました。でも、新宿まで来ても深川まで来るチャンスはありませんでした。今は特急で東京まで2時間余り、高速道路でも2~3時間です。でも当時は、6時間以上をかけて、すす煙の出る列車でいくつものトンネルをくぐり、ワイシャツの首を黒くしながら上京したものでした。

### 深川の由来

こちらにお邪魔するにあたり、由緒ある江戸の深川ということでしたので、インターネットで少々調べてまいりました。今、皆さんの復習と確認をかねてその部分のコピーをご紹介しますと・・・

歴史は：

もとは下総国で、徳川家康が江戸へ入府した後、武蔵国となる。湿地帯であった現江東地区を開拓していた深川八郎右衛門の姓に由来するといわれる。3代将軍徳川家光の時代から富岡八幡宮の門前町として発達し、明暦の大火ののちに木場が置かれて商業開港地域となり、深川岡場所も設置され花街となる。江戸の辰巳の方角にあることより、ここの深川の芸者は辰巳芸者と呼ばれ、いきで気風が良いとされる。両国橋が架けられたのちに江戸図にも載せられ、江戸に組み込まれる。材木商人として財を成した紀伊国屋文左衛門や奈良屋茂左衛門も一時邸を構える。1702年(元禄15年)の大石内蔵助率いる赤穂浪士が吉良上野介の邸に討ち入った事件では、一向は富岡八幡宮の前の茶屋で最終的な打ち合わせのための会議を開いたと伝えられる。曲亭馬琴はこの地で生まれ、平賀源内や松尾芭蕉、伊能忠敬なども深川に住んだ。

1878年、東京に区制が施行された際に区名に採用された。この深川区は現在の江東区のうち横十間川より西側の地域全てであり、現在の江東区深川よりはるかに広い範囲である。1945年3月10日の東京大空襲ではこの深川区に爆撃初弾が投下され、区内は焦土と化した。戦後1947年に城東区と合併し、現在の江東区となる。

深川江戸資料館ができたり、深川飯が東京駅の駅弁のメニューに登場したりで、脚光を浴びるようになった

以上はグーグルとヤフーのページのフリー百科辞典ウィキペディアからですが、内容はほぼ言い当てているのでしょうか？ そう、今は何でもインターネットでわかる時代なんですね。松尾芭蕉や伊能忠敬も住んでいた、なんて夢がありますよね。

余談ですが、今、大学生がこの方法を宿題の論文作成に使うということで問題になっていますね。「コピペ」といって、インターネットにある解説文や論文をコピーしてはペースト、つまり貼り付けていく。こうして自分の考えや手で原稿を書かなくても、教授に提出する論文はできあがる、しかも自分の力で書いたものよりはるかによい論文ができあがるわけです。教授の論文審査も難しくなったものですね。

## 自己紹介

ここで簡単な自己紹介をさせていただきます。

昭和 16 年(1941 年)、信州・長野県に生まれました。ちょうど太平洋戦争が始まった年で「武」という名前は、男は武士のように強くあれ、といった親の願望ではなかったかと思います。早稲田大学を卒業後、国立にある NHK 学園高校の教諭として勤務、その後、聖教新聞社に入社し、特派員としてパナマに 10 年間駐在しました。この間に北南米およびヨーロッパの 32 カ国を訪問する機会に恵まれました。

2001 年に定年退職後、昭島の近くにある横田基地内のセントラル・テキサス・カレッジで学び、2002 年にはスペインのマラガ大学に 1 年間留学しました。現在は、シルバー人材センターで J R 昭島駅前の自転車管理の仕事ほか、理事・広報部会長として会報の編集にもあたっています。また海外留学アドバイザーとして元の職場で留学生の相談指導や、N P O 法人立川多文化共生センターで、在日外国人支援のボランティア活動にも参加しております。

一方、「世界文学紀行」を定年後のライフワークとさだめ、「名作の舞台を訪ねて」各国を訪れ原稿を書き、新聞や雑誌に寄稿しているところです。その原稿や写真は自分の HP にも載せていますので、興味のある方はご覧になってみてください。URL は <http://homepage2.nifty.com/donky/> となっております。

## あゝ 禿げた頭でも値引きなしか？！

さて、今日こちらにお邪魔し、会場に私と同じような仲間がいることを見て親しみを感じております。この頭です。

先日、こんなことがありました。

私は年金生活に入ってから、現役時代と違ってできるだけ節約生活を心がけるようにしています。散髪代もその一つです。床屋さんに行くのをやめ、けっこう手先の器用な家内がハサミを操り、私の頭を刈っています。これで、それまで毎月 3000 円から 4000 円かかっていたものがただになりました。

現役時代と違い、社内で身なりを整えることに気を使ったり、若い女性に気に入られようとする気遣いが少なくなったからです。本当はそれじゃいけないんでしょうがね。

「年を取るほどにおしゃれを」というのは女性ばかりでなく男性にも適用されるものですが、私の場合、なんてったってその髪自体があまりないので、頭のおしゃれの仕様がなない。

とはいっても、大事な行事に参加するときや、大切な人と会わなければならないようなときには、やっぱり床屋さんに行くんですね。

でも、この頭です。他のお客さんよりも髪の毛のある部分がぐっと少ない。そこで散髪が終わり料金を払う段になって、店主に言ってみたんですね。

<落語の話し方で>

「マスター、ほらご覧のように、私の頭はほかの人の髪の毛の量の半分ですよ。禿げている部分はまったく手をかけなくてもよいし。だから料金も少しは割り引いてくれませんかねえ」

と、その主人、なんて言ったと思いますか？

「旦那さん、そんな無理をおっしゃらないでくださいよ。確かに旦那さんの髪の毛は少ない。ですから、私としては一本たりとも抜いたり傷めたりしてはいけないと思って、大変な気を遣ってハサミを動かしているわけですよ。逆にこちらが割増料金をいただきたいくらいですよ」

敵もさるもの、上手をいくもんですねえ。

私の頭を見てあの中高年のアイドル、綾小路きみまろさんだったらこう言うでしょう。

中学時代はイガクリ頭。高校時代は髪もふさふさの美少年でした。

あれから 50 年——。

昔は目の前が明るかった。今、明るいのはこの頭だけ……。

ともあれ、頭が輝いていること即、人生が輝いていることには通じませんが、でも、頭の輝きのように、定年後の人生も輝かせていきたい、というのが今日の私の話の影のテーマであります。

さて表のテーマは世界の文化・生き方比較。タイトルはレジュメにも書かれております通り「飛行機に乗ったドン・キホーテの世界漫遊」。実は私のホームページのタイトルも「ドン・キホーテの広場」となっております。

「東京のドン・キホーテ」の名前の由来

なぜ私がドン・キホーテなのか。

それは今から半世紀以上も前のことになります。小学校 6 年のときの学芸会で「ドン・キホーテ」の劇をすることになり、私がドン・キホーテの家来サンチョ・パンサを演じたのです。以来、その奇想天外の物語に魅せられて少年版の本を、大人になってからは翻訳物の全巻を、またスペイン語がわかるようになると、今度は専門の先生について原書にも取り組んだのです。さらに松本幸四郎がドン・キホーテを演ずるミュージカル「ラ・マンチャの男」の舞台を 3 回も見に出かけたものでした。

正義を求め、強きをくじき弱きを助け「見果てぬ夢」を追いかけていく——そのドン・キホーテの生き方に魅せられて、私も定年になると自らを「東京のドン・キホーテ」として勝手に名乗り、世界文学紀行「名作の舞台を訪ねて」なんて“見果てぬ夢”に向かって各国を旅している次第です。

物語の中のドン・キホーテは槍を掲げ、愛馬ロシナンテに乗っています。遠くに見える

風車を悪魔の巨人と考えたドン・キホーテが馬にまたがり槍を持って突進する話は、余りにも有名ですね。

作品ができてから 400 年たった現在の東京のドン・キホーテは、槍の代わりにカメラを持ち、馬の代わりに飛行機にまたがっての世界漫遊となった次第です。

### **12 年間の海外生活で 35 カ国を訪れる**

前置きはこのくらいにして、さっそく本題に入っていきたいと思います。私はこれまでの人生を通算しますと、海外にいた期間は 12 年間ほど。現役時代に特派員として訪れた国、また定年後に訪れた国を合わせるとちょうど 35 カ国になります。地域的にはヨーロッパと主にはラテンアメリカつまり中南米でした。そこできょうは、これらの国で見たり体験した面白いエピソードの数々をご紹介しますと思います。

#### その 1

#### **国際電話の際の挨拶の当惑**

現在は I T 時代に入り、海外から日本に原稿を送る手段にも大変な変化が起こっています。今は、日常生活でも、文字を相手方に送るのには F A X やメールが当たり前になっていますが、約 30 年前、私がパナマに赴任した当時は、F A X さえもまだありませんでした。体験談のように急がない原稿は航空便で、ニュース性の急ぎの原稿は、電話で送ったものでした。

書いた原稿を電話口で読み上げます。それを、本社の担当記者が、原稿が短ければそのまま書き留め、長ければテープに録音し、それを再生するわけです。そのとき、まず電話口での最初のあいさつにとまどったものでした。時差の問題です。

例えば、ブラジルで、すべての取材が終わって原稿をまとめ送るのは夜の 10 時頃。ところが日本では朝の 10 時です。(ブラジルは日本とちょうど 12 時間遅れの時差があります)。

こちらはホテルのあまり明るくないライトのもとで「コンバンワ」。でも相手から戻ってくるあいさつは「オハヨウゴザイマス」。しかも、こちらは一日の仕事の疲れでブランデーなど寝酒の時間なのですが、相手は朝の空気を胸いっぱい吸いながら、モーニングコーヒーで一番張り切っているときなんですね。

#### **“エッ 日本は地球の裏側” だって？**

そう、ブラジルといえば、こんなエピソードもありました。位置はちょうど日本の真反対にあります。これをある時、ブラジル人と話をしている「日本の真裏のブラジル」と言ってしまう、ずいぶん反撥されたことがありました。

「何言ってるんだい。ブラジルから見れば日本こそ裏側じゃないか！」と。たしかにその通りですね。円い地球から見れば、どちらが表でどちらが裏かは決められないわけです。

ちなみに、南米で見る世界地図は日本のものとはかなり違っています。ちょっと小学校時代に習った世界地図を思い出してみてください。地図の図法によっても違いますが、

もっとも一般的なメルカトル図法では、日本が地図のほぼ真ん中にあり、その左側にアジア、ヨーロッパのユーラシア大陸、アフリカ大陸、右側に太平洋をはさんで北米大陸、南米大陸が描かれています。ブラジルなどは右下の端の方にある。

ところが、あちらの地図では、真ん中に北南米大陸が描かれています。ですから、日本の位置はというと、ずっと左上の端、日本の地図でいうイベリア半島、つまりスペインの端、世界の外れのような位置になるのです。彼らの言うことも分かるような気がしますよね。

その2

### 「赤道」クイズ・・・地球をまたぐ

ここでクイズをしてみましょう。これは中学校の総合学習での講演の際に生徒によく聞いてみる質問です。人生経験の豊かな皆様にこんなことを聞くと失礼に当たるかもしれませんが・・・

地球儀または世界地図に描かれている「赤道」の正しい定義は次のどれでしょうか？

<ボードに地図>

- ①「地球上に引かれている赤い線」
- ②「地球上の最も暑い点のつながり」
- ③「地球の横腹を一周し北半球と南半球に二分する線」
- ④「地心を通して自転軸に垂直な平面が地表に交わる大円」

<各々を解説、正否を確かめていく>

3番、4番は一応、正しいといえるでしょう。でも2番は異論が出てきて、さらに1番ともなると論外ですよね。

エクアドルに行った時<実は国名の「エクアドル」とはスペイン語で「赤道」の意味なんです>、私はその「赤道標」といわれるものを訪れました。首都キト市の郊外へ車で小1時間。荒涼とした禿山のふもとのやや広い台地に、基台の各辺が約8m、高さ15mほどの、先端に向かってやや細くなっていく四角柱が立っていました。その上に直径3mほどの地球儀がのっかっています。<写真を指しながら>

四角柱の各面には、それぞれ[E][O][S][N]との文字が刻まれています。それぞれスペイン語で「東」「西」「南」「北」の頭文字なんですね。

[E] (東) [O] (西) 面にあたるコンクリートの地面の真ん中には、幅10cmほどの1本の線が東西に伸びていました。これこそまさに「地球を南北に二分する」という“赤道”なのです。

でも冗談ながら、色は何もついていませんでした。赤色でもなく、地面の汚れと土ぼこりでそれは黒色に近くなっていました。私は先に友人から聞いていた指示を思い出し、その線を両足でまたぐと、持っていたカメラを同行の友人に渡し、ポーズをとったんです。友人は破顔一笑。「セニョール・シミズ!とうとう地球をまたぎましたネ」——と。この瞬間、私は地球の南北両半球に足をかけたことになるのだというんです。

たいそうなユーモアですが、言われてみるとついそんな気になってしまうから面白いですねえ。これも冗談ながら、またいだ両足も股も、熱さでヤケドをするようなことはありませんでした。

周囲の気温は暑さとは程遠く、摂氏 10 度前後で肌寒いほど。キトが海拔 2800m の高地にあるからです。ここから西に 1000 キロ行くと、同じエクアドル領のガラパゴス。ここは太平洋の赤道直下で、1 年中 30 度前後の熱帯です。

<レジュメの真ん中の写真です。ついでに、右肩の写真はドン・キホーテの著者セルバンテスの生家の前で撮ったもの、その下はドン・キホーテが突進した風車のあるラ・マンチャの平原。右下は、カリブ海の島に住むパナマの原住民クナ族の写真、下の左側は昨年訪れた「赤毛のアン」の舞台カナダのプリンスエドワード島にある赤毛のアンが住んでいた家、右は一昨年訪れた『風とともに去りぬ』の舞台ニューオーリンズのミシシッピ河畔です>

さて、この赤道の下半分、いや南半分の南半球では四季も反対になります。日本は今、オーバーコートのを立てる真冬で日本海側は連日、雪の日々。太平洋側は寒いけれども乾燥したカラカラの晴天続き。南米のブラジルやアルゼンチンでは、今は半そで姿で飛びまわれる暑い夏の季節に入っています。

今、私は「日本海側」「太平洋側」と言いましたが、昔はNHKの天気予報でも「裏日本」「表日本」と言っていました。ブラジルのケースと同じようにやはり「裏」という言葉はイメージ的によくないことがわかってきた。そこで日本海側、太平洋側と変わったんだと思います。もっと言えば、中国地方の山陽と山陰地方の呼び名で「山陰」はあまり望ましくない、として「山光」と呼ぶ人もおりますね。

その 3

### 「五つの『あ』の原則」

ところで、これだけ交通や通信の手段が発達しても、それぞれの国の人々の生き方や生活慣習はそんなに変わるものではありません。

新幹線が 10 分か 15 分おきに正確にピタリと発着する。都内の通勤電車も 2～3 分おきに入ってくる。少しでも遅れると皆イライラし出すという日本です。

それに比べ、私のいたパナマではそうした問題はありませんでした。それは電車がなかったからです。近場は自動車かバスで、遠くへは飛行機が一般的でした。

そんな分、秒を争う時間正確な日本の競争社会から、何事においてもゆったりしたリズムのラテン・アメリカ（中南米）に赴任したばかり、ずいぶんイライラしたものでした。

向こうは何事も「アスタマニャーナ」でよいのです。これはスペイン語で「あしたまた」という意味ですが、5 時または 6 時になると、仕事が途中で、店にお客さんがい

でも「アスタマニャーナ」で帰ってしまう。仕事の約束の期限が守られなくても「アスタマニャーナ」。それよりも自分の生活を大切にしているんですね。

パナマでも、夜遅くまでオフィスに電気のついているのは、大部分が日系の駐在企業でした。もっとも、先ほど申し上げた時差の関係、ということもあり得ます。パナマと日本の時差は 14 時間。東京本社が昼間の時間に、上司と連絡を取るためには、向こうは夜の時間に電話をしなければならないわけです。

ところがパナマ人は、社員のみならず役員も、官庁の局長クラスの幹部職員も、定時には殆ど帰ってしまっているのです。

私も、「これこれ、しかじかの取材をいつまでに」との指示を日本から受け、一生懸命取り組むのですが、なにせ相手のあることです。はかどらない交渉と仕事にとうとう「五つの『あ』の原則」を編み上げたのです。

<ボードへ転記>

「あせらず」「あわてず」「あくせくせず」「あてにせず」そして「決してあきらめず」――。

この「五つの『あ』の原則」を心にとどめている限り、それほどイライラすることもなくなってきたわけです。海外ではまさに“郷に入ったら郷に従え”が大事なんですね。

その4

「日本に行ったら日本人だらけだった！」

もう一つの大きな特徴は人種の混交です。

よく、ニューヨークは“人種の坩堝（るつぼ）”と言われていますが、パナマシティも同じです。ある時、日本での研修会に参加したパナマ人が帰国するなり言ってきました。

「S r シミズ (M r シミズ)、日本での研修会は素晴らしかった。大勢の仲間にも会うことができたし、あの新幹線にも乗ることができた。日本人は本当に親切で感激しました。充実した日本滞在だった。でも、とても驚いたことが一つあったんですよ。それは、日本に行ったら日本人だらけですネ」と。

先住民のインディオと、新大陸の発見以来、ヨーロッパからやってきた白人、それに運河の建設時に労働者として入った黒人や中国人。その子孫。そしてその混血。またその混血……。極端な言い方をすれば、100 人集まれば、100 人の肌の色が違うパナマからすれば、彼の発言もうなずけるような気がします。

もっとも、日本も近年は、いろんな国の人が東京にもまた地方にも住むようになり、状況はかなり変りつつありますが・・・・。

その5

世界で語られている日本人のジョーク



こうして海に囲まれた、世界の中でも特異な存在である日本と日本人についてこんな小咄も流布しています。

ここでまた質問です。

「ある日、大洋を航海していた船が事故で沈没してしまいました。海に放り出された乗客は、遠くに見える島に向かって泳ぎだしました。その中のたった3人だけ、この小さな島に泳ぎ着くことができたのです。若い男2人と女1人でした。さて、この男2人は女1人をめぐってどんな行動をとったのでしょうか？」<レジュメのイラスト>

答えは次の通りです。

フランス人：1人は彼女の夫に、もう1人は彼女の愛人になりました。

イギリス人：なんと2人は、彼女を放っておいて、自分たち2人で愛し合い始めたのです。

イタリア人：2人は彼女を自分が手に入れようと、決闘を始めたのです。

では日本人はどうしたのでしょうか？

日本人：2人は、島のどこかに電話がないかとあわてて探しに出かけました。本社に電話して、上司の指示を仰ごうとしたのです。

——この小咄、日本人の行動形態の特徴をよく表わしていると思いますよね。

もう一つ、同じようなよく知られたタイタニックのジョークがあります。多分、この会場にも知っていらっしゃる方もいるかと思いますが・・・。

<ジェスチャー大きく>

「いよいよ沈没しかけた船から、男も女も我先にと救命ボートへ避難しようとした。大混乱になろうとしている現場で、婦女子を優先させようとして船長が説得を試みま

す」  
まずアメリカ人男性に：「キミはヒーローになりたくないか！」(解説)

イギリス人男性に：「あなたは真性のジェントルマンだ！」(〃)

ドイツ人男性には：「君の国の法律ではそうなっているよ」(〃)

そして日本人男性には：「皆がそうするからあなたもそうした方がいいと思いますよ」

このように、日本人は、まず周りに合わせようとするんですね。周囲の目を気にし、突出することを恐れ、横並びを好み、他人のするように自分もする、という傾向を持っている。日本人は、他人の目を気にしすぎるように思いますね。

私の好きなドン・キホーテの言葉にこういうのがあります。

「理想と正義に向かって突進するオレのことを、皆はおかしいと言う。でも、やりたいことがあるのに、世間の風評、体面なんかを気にして現実に妥協、やろうとしない彼らこそ

おかしいんじゃないのかね」

この言葉の後半部分は、日本人のメンタリティー、傾向性をも表わしていると思えますね。

### **国際化とは？真の国際人とは？**

こうした時代に入って大事なことは“心の国際化”だと思えますね。海外経験が多いからといって必ずしも国際人につながるわけではない。外国語ができるからといって、これも必ずしも国際人というわけでもありません。

国際人の要件とは、私の考えるところでは：

1. 自国の文化に深い理解と愛情をもち、必要に応じてそれを外国人にも伝えることが出来ること。
2. 他国の文化を理解し、現地の習慣や伝統を尊重、よい面は積極的に学んでいこうとする姿勢を持つこと
3. どの国、どの民族とも友好理解を心がける姿勢があること  
といった点に集約されるような気がします。

となれば、皆さんの中の誰でもが、その考え方、姿勢しだいで国際人にもなっていけるわけです。

### **寝ている間に仕事が進む「魔法のマクラ」**

国際化とインターネットの普及で、世界はますますつながりを深めています。ここで、私のパソコン生活の最前線のエピソードを紹介してみます。

ちょうど3年前にホームページを立ち上げました。すると、知り合いの外国人の友人から、「自分たちも書かれているものを読みたい」との希望が寄せられてきたのです。そこで、それぞれの言語圏や文化にも共通し、興味深く読まれそうなテーマに絞って自分で翻訳を始めました。

でも、正しい翻訳のためは第三者のチェックが必要です。そしてチェックはネイティブが理想なのです。私も国内に多くの外国人の友人がおりますが、それぞれ忙しくてチェックを頼むのには気が引けます。プロに頼めば相当額のチェック料金を取られるでしょう。

そうこうしているなか、なんと「記事を読みたい」と言った海外の友人自身が翻訳のチェックを申し出てくれたのです。英語はアメリカに住むKさん、スペイン語はパナマに住むMさんでした。Kさんは横田基地で知り合った元米軍将校、Mさんは私がパナマ特派員だった当時の友人で、元獣医。

彼らの申し出に心から感謝しているところですが、これをもう一歩広げて考えていくと、なあんだ、アメリカでもパナマでも、そこに住んでいる人はいわば誰でもが、つまり100パーセント近くがネイティブであるというわけです。

こうして、翻訳した原稿を夜、メールに添付して送っておくと、時差の関係で向こうは昼間、早いときには翌朝には私のパソコンにチェックされた原稿が戻っています。こちらが寝ている間に仕事は進んでいるのです。

「フラット化する世界」(トーマス・フリードマン著)がベストセラーになっています。ここでは、パソコンによる仕事が、インターネットを使いアメリカからインドへ、インドからイギリスへ、そしてまたイギリスからアメリカへと地球の昼時間を追っかけて進んでいる、つまりそれぞれの国の労働者は仕事が終わって眠っていても、リレーされたその作業は 24 時間どこかの国で続いていると述べています。

30 年前、私が特派員としてパナマに赴任したころは、メールはおろかファクスさえありませんでした。日本語もローマ字で打ちながらのテレックスによる通信でした。すごい時代に入ったものですね！いみじくも友人が言ったものです。

「あんたはいいね。“魔法のマクラ”を持っている。自分がよだれをたらし、いびきをかいながら寝ている間に仕事をやってくれるという魔法のマクラをさ！」

### 日野原重明氏から学ぶ

さて、世界漫遊のエピソードの羅列をしてまいりましたが、話を締めくくるにあたり、最初に申し上げた「定年後を輝いて生きる」との影のテーマにひとこと触れておきたいと思います。ここにいらっしゃる大部分の方が、私を含めシニアまたはシルバーエイジに属しているように思われるからです。

私は人生を輝かせていくポイントは、ドン・キホーテのように、いつまでも夢を掲げていること、そして新しいことを始めることを臆しないことだと思っています。

たぶん皆さんもご存知の日野原重明さんは今年 97 歳。今も聖路加国際病院の理事長を務め、活発に書き物や講演活動をしていることはよく知られていますね。私は定年になった年、有楽町の東京フォーラムで行われた「サードエイジ」のフォーラムに出席しました。そのときのメインスピーカーが日野原さんでした。当時は 90 歳。約 1 時間、立ったままで、元気はつらつの講演でした。

そのときのドクター日野原によると、今も 3 階の自分のオフィスまでエレベーターを使わずに階段を登っているとのこと、それもときどき 2 段とびで登る、と言っていました。世界各地での講演にも行っています。その際、空港ではベルト(動く歩道)を使わない。かばん等の荷物を持ったまま通路を歩き、ベルトに乗っている人を追い越していくのが快感なんだ、なんて言っていました。

つい最近でも、新聞紙上のエッセイで、駅のエスカレーターの右側を駆け上り、左側で立ったまま動かない若者たちを追い抜いて、自分が先に上階に達すると、いつも「やったな」と心の中でガッツポーズ。その達成感がますます健康にしてくれる、と語っています。つまり、よく歩け、よく体を動かせ、ということなんですね。

58 歳のときにハイジャックに遭った。死ぬかもわからないような状況に合ったことで 60 歳からの人生の新しいスタートをさせたといいます。「なにか年とともに少年のような冒険

心が出てきた。新しく始めることを忘れなければ、いつまでも若い。60歳からが本当の命、本当の人生だということをお伝えしたい」と言っていました。

その日野原さんが「生き方上手」のなかで提唱していることが、「新しい老い方」を考えていく上で参考になると思われますので、概要を紹介してみたいと思います。

——もう20年も前になります。吹雪の舞う石狩川の河岸に立って私は友人を勇気付ける言葉を探していました。

「何か新しいこと、そうですね。絵でも描いてみたらどうですか?」。唐突な提案に、彼は「絵なんてとんでもない」と声を上げました。

・・・若いころから実業家としての才のあった知人は、当時、私より若い60代半ば。まだまだ大きな仕事に挑戦するつもりが、3度のガンに見舞われてからというもの、仕事が手につかない。ガンの再発ばかりが気になって、私が勧めるわけでもないのに、忙しい仕事の時間をやりくりして聖路加国際病院で繰り返し人間ドックを受けていました。

主治医としての私は、万全の健康管理を約束して、ガンへの不安をいくらか軽くしてあげることができました。けれど、この先もガンの恐怖にとらわれて生きるのでは、まことに彼が気の毒です。実業家としての将来を断念しようというばかりか、人生を謳歌する気力まで失いかけている彼に、何とか生氣を取り戻してほしい。

私はいたって大真面目でしたが、冒頭の一言は、仮にそばで聞く人があったなら、さぞかし突拍子もない提案に聞こえたかもしれません。けれど、10年後、彼は絵画で賞を取り、銀座で個展を開くまでになりました。おそらく彼は、私の勧めに従ってすぐさま絵を描き始めるような心境にはなれなかったでしょう。絵筆を握るようになって、「なぜこんなことをしているのか」と首をかしげることもしばしばだったでしょう。

それでもあえて未知の世界に身を投じたからこそ、一段と強い、新しい自分を再生できたのです。80歳を過ぎた今、彼は仕事でも現役であり続け、絵画にも専念する日々を送っています、と。

またこうも綴っています。

——人生に問題を抱えていない人などはないものだと、日々患者さんを診察しながら思うのです。他人がうらやむような家庭や地位や財産を持ち、まさに人生の成功者と思受けられる人にも、はたからはうかがい知れない悩みや苦しみがあります——と。

人生の真実の姿だと思いますね。

そして、[新しいことを創(はじ)めるのを放棄したところから老いが始まる]とも言っています。

思えば私自身は、経歴も経験も雲泥の差のある人生の大先輩・日野原先生の足下にも及びませんが、それでも定年前後から創めた新しい挑戦が、予想もしなかった世界を切り開いてくれていることを実感しています。

それはホームページのトップページの写真にあるように、ギターと料理です。ギターは

定年 2 年ほど前、まったくの初歩から始めたのがきっかけとなり、スペイン留学の際には個人教授を得て、数曲のレパートリーをもてるまでになりました。今は講演の合間などの演奏で、皆さんにリラックスしていただくこともできます（きょうは時間も限られていますので）。米寿を迎えた、遠方に住む義母のところに行き、昔懐かしい曲をつまびいてあげると、涙を流して喜んでくれました。“ああ、始めておいてよかったなあ”としみじみ実感したものでした。

料理は定年になってすぐ、近くの料理学校（昭島クッキング）に週に 1 回、1 年間通いました。おかげで、現役時代にはほとんど包丁さえ握ることのなかった自分が、今は和・中・洋あわせて学んだレシピは 100 を超えています。そして今も、毎月 1 回、市の福祉会館で行われている「男の料理教室——食楽会」で腕を磨いています。

今は「男厨房に入るべし」の時代です。このことについては、もっとしゃべりたいところですが、時間もですし、テーマから外れ、なかには「俺の生き方は違う！」と反発心を抱く方もいてはいけないので、これ以上は触れません。

### ライフワークの世界文学紀行

もう一つ、私が新しく始めたことといえば、4 年前に出版 400 周年となった「ドン・キホーテ」から始めた世界文学紀行『名作の舞台を訪ねて』です。紀行文は郷里の信濃毎日新聞に掲載され、それはセルバンテスの生まれたスペインのアルカラ市の新聞にもスペイン語で掲載されました。

3 年前には、「風と共に去りぬ」の舞台アトランタとニューオーリンズを訪ねました。昨年は出版 100 周年となった「赤毛のアン」の舞台・カナダのプリンス・エドワード島を訪れてきました。

この後はシェクスピアの作品を予定しています。あまりにも多く迷ってしまいましたが、まずは「ロミオとジュリエット」や「ベニスの商人」のイタリア、「ハムレット」の舞台デンマークを。それからゲーテの「ファースト」のドイツ、ユゴーの「レ・ミゼラブル」のフランス、トルストイの「戦争と平和」、ドストエフスキーの「罪と罰」のロシア、「三国志」の中国——これも舞台があまりにも広大なので、とりあえずは高校時代に学んだ漢詩「赤壁の譜」の舞台を。その後「武器よさらば」また「カルメン」の取材で再びスペインへ等々……どれも青春時代に胸躍らせた、また大人になって人生を深めさせてくれた作品です。

理想は取材費のすべてを原稿料でカバーできることですが、少なくとも半額、あるいは 1 割でもカバーできれば上出来だと思っています。足りない部分は駐輪場管理等の仕事で得たお金を充てていくことにしています。そのために、私は今、週に 4 日、シルバー人材センターで昭島駅前の自転車整理の仕事もしています。

早いときは朝 6 時からですが、体を動かすこと、そして「おはようございます」「いってらっしゃい」と利用者大きな声で挨拶を交わすのが、自分にも元気を与えてくれるので

す。

「定年後は **Having** でなく **Being** が大事」だと言われています。財産や貯金を持っていること<**Having**>も大事ですが、今、何をやっているか<**Being**>が問題。財布にいくら入っているかが問題ではない。心にどんな夢を描いているかが問題だということです。夢が、志が人を作る。大きな夢と志は大きな人生を作るのです。

たまたま、私の場合、現役時代に海外に関係があり、また言葉もなんとかできたことから、やや特殊な恵まれたケースかもしれませんが、お伝えしたいことは、どんな立場、境遇にあり、どんな道を進むにしても、夢を掲げ、それに向かって努力挑戦していけば、どこからか道が開かれてくる、ということなのです。

経済不況が世界を襲っていますが、この半世紀の間に日本の経済は発展し、今はそれなりに生活のゆとりも出てきました。そして高齢化社会の到来により、この長寿の人生を、老後をどう充実させていくかが、個人でも社会でも大きな課題になる時代に入ってきたわけです。

世界で最長寿国の日本。人生 80 年から 90 年の時代です。平均でも定年後まだ 20 年の人生が前途に横たわっています。

フランスでは「年金生活」という言葉は、晩年と言うよりも第二の人生、といった前向きな意味合いが強いですね。アメリカ人は、第一線を退くと、いよいよこれからの人生を楽しむと。だから、服装や化粧も派手になる。

こうした面からいうと、定年は今やゴールではなく、豊かな可能性をはらんだ次の人生のスタートともいえます。定年からいよいよ黄金の日々が始まるわけです。

札幌農学校校長のクラーク博士は言いました。

**Boys be ambitious!** 少年よ大志を抱け！

私はこれをもじって、

**Seniors be ambitious!** 熟年よ大志を抱け！

と訴えたいと思っているところです。

やりたいことがあるか、行きたいところがあるか、会いたい人がいるか、(思いを寄せられるような人がいればなお結構)、ときどき点検をしてみるのもよいと思います。お金がたくさんあるから充実した生活を送れるのではない。生きる知恵があつてこそ、希望に燃えた楽しい生活を送ることができるわけです。

そう、世界には経済的なものだけでなく、もっとエキサイティングで大事なことがいっぱいあります。

小説『ドン・キホーテ』のなかで、従者のサンチョ・パンサが言っています。

「人間、寝てえるうちは、身分の高え者も低い者も、貧乏人も金持ちも、みんなおんなじ

でき」

「この世を捨てて、地の下へもぐる段になったら、お大名も日雇いも、おんなじように窮屈の道を歩くだし、法皇様のからだも給仕係のからだも、よしんば背丈にちがいはあろうと、占める広さには変わりはない」

——たしかに、誰でも寝るときは、あるいは死ぬときは、どんなに頑張ってみても、たたみ2畳以上を独占することはできないですね。それにどんなにお金や資産をためていたとしても、それを死後の世界に持っていくことはできません。

仏典に「蔵の財より身の財、身の財より心の財第一なり」との言葉があります。蔵の財とは、いわゆるお金や資産ですね。身の財とは、地位や名誉、また健康というところでしょう。そして、心の財とは、人間としての生きかた、他人を思いやる心、もっと言えば、それは志ともいえるでしょう。そして、お金や資産、名誉や地位よりも、人間としての心を、生き方を豊かにしていくべきだ、との教えだと思います。

#### 定年後を輝いて生きるために

そして最後に——人生を充実させ、輝かせていくカギは、私は冒頭に申し上げた「ハゲアタマ」にあると思っています。イヤ、私のこの頭のようにする必要はございません。

散髪の料金は安くないけれど、「はげあたま」も決して捨てたもんじゃない。「定年後を輝いて生きる」ためには、この「はげあたま」、<ボードに転記>、つまり「はつらつ」と「げんきに」「あかるく」「たのしく」そして「まあるく」生きていくことです。特にこの最後の「まあるく」が大事ですね。人生、すでに甘いも辛いも経験し、角が取れて「まあるく」なっているはずですから、今さら人間関係でギスギスしてもしょうがない。穏やかに「まあるく」行くことです。自分のためだけにキュウキュウしているのではなく、人を助け、人を讃え、人を褒めていくことです。そうすれば自分が助けられ、讃えられ、褒められるようになっていきます。

「人のために灯をともしれば、自分の前も明るくなる」と言われるとおりでしょ。自分が明るく輝いていけば周囲も明るくなっていきます。

いつも感謝と笑顔の習慣を。そこから人生が輝いてきます。つまらない顔をしていると、つまらない人生になってしまいます。生命に弾むような勢いがあれば、必ず人生も躍動してくるでしょう。残された人生の時間をどんな色に染め上げていくことができるかは、まさに各人の腕の見せ所となってくるのだと思います。

世界の文化比較から生きがい論へ、そして禿げ頭論へと、話しはあっちこっちに飛んでしまいましたが、皆様が何かをお感じになり、今後の人生のヒントとなり、御参考になればこんな嬉しいことはございません。

これをもって私の話は終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。